

～北海道編～

とうこん
新商品「闘根[®] 242&ネちからアップ」の導入事例紹介



雪印種苗(株)
 畑作園芸本部 北海道営業課

1.はじめに

2008年より育苗用液肥「闘根242」及び、種子粉衣用資材「ネちからアップ」が新発売となりました。「闘根242」は乳酸菌培養液を濃縮・液肥化したもので、主に育苗時に使用して健苗育成を助ける液肥です。「ネちからアップ」は闘根を基材に吹き付けて粉状にしたもので、播種時に種子に粉衣して使用し、良好な初期生育を助ける資材です。

(詳しくは前号2008年秋冬野菜特集号の特集4、5をご覧ください)

今回は昨年の試験段階からお世話になっている(株)柳沼を通じて北海道東川町、東神楽町での事例をご紹介します。(株)柳沼は生産者と消費者の橋渡し役企業として様々な取り組みをしておられます。東川町、東神楽町は北海道中央部の上川盆地に位置し、旭川市に隣接しています。上川盆地の肥沃な大地を活かしての稲作が盛んで、北海道でも有数の米どころとして知られています。また、ホウレンソウなどの野菜の施設栽培も盛んな地域です。

2.「闘根[®] 242」の水稲育苗での導入事例

(東川町 小林喜一さんのケース)

品種はおぼろづきで使用していただきました。おぼろづきは良食味米として育成され、近年栽培面積を急速に伸ばしている品種です。しかし、巷では作り方が難しい品種とも言われています。

小林さんには「闘根242」を育苗初期の出芽1週間後と移植直前(3日前)の2回使用していただきました。写真1は移植直前に育苗ポットから苗を取り出したものです。処理区の苗は十分に根が巻き、ポット下部より根が飛び出しています。苗の良好な根張りはスムーズな活着のみならず、移植時の作業性の向上にもつながります。

近年、北海道では水稲の移植時期の気候が低温になる傾向があります。そのような時でも「闘根242」を使用した苗はすぐ活着したとのことでした。写真3は8月訪問時の水稲の根張りの状況です。「闘根242」を使用した苗は、移植後3ヶ月を経過しても良好な根張りを維持しており、今後の収穫が非常に楽しみです。



写真1
 移植直前の水稲苗根張り
 (左:闘根242処理区、右:無処理区)



写真2 闘根使用苗を移植した水田と小林さん



写真3 本田での根張り比較
 (左:無処理区、右:闘根242処理区)

3.「ネちからアップ」の ハウレンソウでの導入事例

(東神楽町 神藤清一さんのケース)

神藤さんはハウレンソウ栽培を始めて7年になりますが、年々連作障害が問題になってきています。その障害回避のために灌水や寒冷紗被覆のタイミングを工夫したり、微生物の資材を活用するなど様々な努力をされています。今回、「ネちからアップ」を播種前に種子粉衣して試験していただき、同一ハウス内で処理区、無処理区と分けて播種された結果、写真5のように欠株数が減少していました。根張りと連作障害の関係の解明が今後の研究課題です。

また、「ネちからアップ」を使用した箇所では葉が肉厚になり、一箱を詰めるのに必要な株数も少なくすみ、増収効果が認められました。余談ですが、「ネちからアップ」を使用した箇所では根張りが良く、間引きしづらいものもあったとのことでした。



写真4 ハウレンソウ根張り
(左:無処理区、右:ネちからアップ処理区)



写真5 ハウレンソウハウス
(左:無処理区、右:ネちからアップ処理区)

4.さいごに

健全な根の生育は作物の不利な環境に対する耐性を高めます。その不利な環境とは移植時の植え傷みであったり、移植後の低温や早魃であったり、連作障害であったりします。いずれも土壌と根が深く関わっていることで、健全な根の生育はこれらの不利な環境と闘い、作物の良好な生育に貢献します。

作物の根の生育が促進される「鬮根242」と「ネちからアップ」を作物の健やかな生育にお役立ていただきたく、今後とも御愛顧のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

本記事を作成するに当たり、小林様、神藤様と(株)柳沼の皆様には貴重なお時間を取材のために割いていただきましたこと、誌面をお借りして深く御礼申し上げます。ありがとうございました。



写真6 ハウレンソウハウスと神藤さん



写真7 好評発売中!「鬮根® 242」と「ネちからアップ」